

國學院大學學術情報リポジトリ

國學院大學と伊豆研究： 特集「伊豆の歴史と信仰」によせて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-03-15 キーワード (Ja): 伊豆, 考古学, 神道学, 民俗学 キーワード (En): 作成者: 深澤, 太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001464

國學院大學と伊豆研究―特集「伊豆の歴史と信仰」によせて―

伊豆地域研究のはじまり 伊豆国、すなわち静岡県の伊豆半島と、東京都の伊豆諸島からなる一帯は、かねてより國學院大學の主要な研究フィールドとして位置付けられてきた。それは、「神道考古学」の祖である大場磐雄が、転地療養先の伊豆大島で民俗採訪を行った大正十四（一九二五）年に遡る。伊豆国は、そもそも九十二座もの式内社が鎮まることでも知られているが、主に考古学・神道史学的な方面から通史的に信仰史を追求する場として伊豆地域が選ばれてきた背景には、当初から意図した一定の研究計画があったわけではない。むしろ、個々別々の契機によって手がけられた事業の成果が各々に蓄積され、その結果として生じた新たな課題を解決するため、次第に多分野の協働を要する大きな研究事業が実態化してきたのである。

通史的な神道考古学・神道史学 本格的な伊豆地域研究の開始は、伊豆の出身である江藤千萬樹・長田実らに誘われた大場が、下田市洗田遺跡から三倉山に沈む夕陽を拝して「神道考古学」の樹立を決意した昭和二（一九二七）年のこと。古墳時代のはじまりとともに産声を上げた原「神道」の考古学的研究は、この伊豆から生まれたのであった。また、内務局神社局考証課に勤務していた大場は、宮地直一の指導を得ながら、『国幣小社伊豆山神社』『伊古奈比咩命神社』などの社誌を編纂する中で、考古・歴史・民俗分野にまたがる神社通史を手がけている。戦後も、熱海市史の編纂に伴って、大場や小出義治らが、多賀神社（式内社・白浪之弥奈阿和命神社）の淵源となる古墳時代の上多賀宮協遺跡や、日金山の中世礫石経塚、走湯権現の信仰にまつわる伊豆山の古美道遺跡を調査するなど、通史的な信仰史の研究を行ってきた。

伊豆諸島の中世積石塚と和鏡 伊豆諸島に関しては、東京都教育委員会による斡旋を契機として、昭和五十六

(一九八二)年から考古学研究室や、考古学資料館(現在の國學院大學博物館・学術資料センター)を中心に、古代から近世にかけての祭祀遺跡を調査している。その嚆矢は、考古学研究室の吉田恵二を担当者とする三宅島の調査であり、昭和五十六(一九八一)年の中郷遺跡における発掘実習を切掛けとして、改めて和鏡を伴う事例を含む中世積石遺構に注目が集まった。同じく吉田が担当して、昭和五十七(一九八二)年から実習調査が行われた三宅島物見処遺跡は、周溝を持つ大型の積石塚であり、墨書礫を伴うことから近世の一字一石経塚である可能性も疑われたが、元代の同安窯系青磁碗・渥美甕残片などが得られているため、むしろ中世の塚墓と考えた方が良いかもしれない。

このほか、永峯光一を代表者とする科研費「海洋信仰の考古学的研究―伊豆諸島における鏡信仰を中心として―」では、考古学資料館構成員を中心として海洋信仰研究会を組織し、平成三(一九九二)～四(一九九二)年にかけて伊豆諸島全域における和鏡の悉皆調査を実施。これは、最終的に内川隆志を中心とする学術資料センター「中世和鏡の基礎的研究」事業まで展開していく。永峯科研に関わる事業としては、青木豊・内川隆志らが実施した利島阿豆佐和気神社境内遺跡・堂ノ山神社境内遺跡・八幡神社境内遺跡、八丈小島烏打遺跡・宇津木遺跡などの発掘調査も行われ、中世から近世・近代に至る石祠と鏡の奉斎にまつわる具体的な事例が得られた。なお、伊豆諸島の積石塚や石神信仰については、吉田・内川・深澤太郎・石井匠らが悉皆調査を行っており、『島々の聖地』シリーズを刊行している。

三嶋神・三島大明神の信仰をめぐって さらに、吉田らが昭和五十九(一九八四)年に調査した式根島吹之江遺跡では、土師器・須恵器類とともに八世紀の直刀・短刀・鉾・鏡形鉄製品などが出土。付近に鎮座する泊神社(式内社・久爾都比咩神社)のはじまりを物語る律令期の祭祀形態を明らかにした。隣接する吹之江東遺跡では、立石も発見されており、石神祭祀の一形態であるとすれば極めて興味深い事例である。そして、考古学資料館の内川隆志らが取り

組んだ伊豆大島和泉浜遺跡C地点の発掘調査では、七世紀後半の土師器・須恵器のほか、鉄製武器・武具や、鈴釧・玉類などの装身具に加え、短冊形の金・銀製品といった貴重な幣帛類を奉げた痕跡も確認された。これは、『日本書紀』天武天皇十三（六八四）年条の白鳳大地震関連記事に前後する時期のものであり、後に「三嶋神」と呼ばれることになる噴火造島の神を祀った最初期の事例と評価し得る。

かかる三嶋神の信仰をめぐることは、昭和五十三（一九七八）年に三嶋健が「三嶋大明神縁起」の翻刻を発表。三宅島の壬生家本、白浜の原家本、新島の前田家本など、縁起の諸本を検討した基本文献となった。続けて、土岐昌訓も「三嶋大明神縁起」の成立背景を検討。この前後に三嶋が取り組んだ三宅島などのフィールドワーク成果は、國學院大學創立百周年記念出版の『日本民俗研究大系』に「神人集団―三宅島の神人を中心にして―」として結実する。さらに三嶋は、式内社研究会による『式内社調査報告』でも伊豆国を担当し、社宝を含めた詳細な調査成果を残した。平成十一（一九九九）年刊行の『国内神名帳の研究』では、三嶋社在庁の伊達家に伝来した「伊豆国神階帳」を取り上げている。

これらの成果は、平成二十二（二〇一〇）年に内川・深澤が主担当として伝統文化リサーチセンター資料館企画展『伊豆半島・諸島における神社の成立と展開―祭祀考古学研究と校史資料活用の現場から―』として公開。さらに、三嶋の研究を受け継ぎつつ、三嶋神の通史的な研究をライフワークとしている吉永博彰は、自身の取り組みも含めた國學院大學による三嶋研究の集大成として、國學院大學博物館の令和五（二〇二三）年度特別展『三嶋の神のモノガタリ―焼き出された伊豆の島々―』を主担当した。なお、この特別展は、伊豆半島ジオパークを所管する（二社）美しい伊豆創造センター（以下、美伊豆）との共催で実施したものであり、文理協働による地域文化の活用と、ユネスコ（国連教育科学文化機関）を介した国際研究発信に道が拓かれた。

走湯山から富士・箱根まで 熱海市の走湯山は、早くから知られた東国有数の霊場であり、かねてより伊豆山神社

本殿裏に経塚が存在することが知られていた。平成十五（二〇〇三）年には、内川らが伊豆山経塚における発掘調査を実施し、その位置を確認している。そして、内川の示唆によって伊豆の修験窟を調査し始めた深澤は、学内研究費や、平成二十五（二〇一三）～二十七（二〇一五）年の科研費「伊豆修験と『伊豆峯』辺路の考古学」などに取り組み、走湯山を拠点とする伊豆修験と、伊豆半島縁辺を修行する伊豆峯辺路修行の姿を浮き彫りにした。併行して、平成二十六（二〇一四）年に富士山世界文化遺産登録記念特別展『富士山―その景観と信仰・芸術―』を企画。これを契機として、走湯山・富士山を含む神仏関係や儀礼の問題にも研究の手を及ぼしている大東敬明や、三嶋研究を推進している吉永とともに考古・神道・民俗分野の協働を本格化させ、富士・箱根・伊豆地域を見据えた総合研究の裾野を広げた。

今後の展望 今日伊豆地域研究では、①神道・神社の発生と展開、②伊豆三嶋神の考古学・神道学・民俗学的研究、③中世積石塚・和鏡と石神信仰、④中世霊場と中世神話・民俗芸能の研究、⑤伊豆国における修験道、⑥伊豆地域における神事芸能等の持続可能性に関する研究と実践、などといったテーマが相互に関連しつつ推進されている。このほか、都立大にいた岡正雄らと東京都の伊豆諸島文化財総合調査に参加した坪井洋文のアーカイブなど、⑦関連学術資産のデジタル化と公開も欠かせない。言うなれば、目的を一にし、考古学・神道学・民俗学などの方法論を駆使した総合研究の場が伊豆地域なのだ。その中には、島嶼部の神事芸能のように、消滅の危機に晒されている研究対象も少なからず認められる。学術的な調査研究を基盤として、在地文化の持続可能な継承・活用の方途を模索していくことも我々に課せられた責務と位置付け、いずれ地域社会への貢献をも果たせれば、これに過ぎる喜びはない。引き続き、國學院大学による伊豆地域研究に関心を寄せて頂き、暖かいご支援を賜うことができれば幸いである。